

空間コードから共創する中川運河
第2回オープンディスカッション
「創造力の空間」でありつづけるために
成果報告

2017年3月31日
都市コミュニケーション研究所

目次

概要	1
ディスカッション要旨	2
ディスカッション記録	3
議論をふまえて	16
次回に向けて	18
謝辞	19

【概要】

- 主催： 都市コミュニケーション研究所
代表：竹中克行（愛知県立大学教授）
- 開催日時： 2017年2月12日（日）13：30～16：00
- 開催場所： 西宮神社・社務所
- 登壇者： 浅井信好氏（月灯りの移動劇場主宰/演出・振付・舞踏家）
高山葉子氏（作曲家/愛知県立芸術大学非常勤講師／
航跡図-artery of sound-企画者代表）
原佳希氏（株式会社スタジオトラス 代表取締役／
有限会社マジックチルドレン 代表取締役）
- コーディネータ： 内山志保
- 参加者： 36名
- ***
- 内容進行：
13：30～14：00 基調レクチャー：竹中克行
「空間コードから共創する中川運河―「創造力の空間」でありつづける
ために」（資料 [OD#02 基調講演公開用.pdf] ）

- 14 : 05~14 : 20 話題提供者の紹介
- 14 : 20~14 : 50 テーマ1—中川運河アートがめざすもの
・なぜ中川運河でアートか ・何のためのアートか
- 15 : 00~15 : 50 テーマ2—「創造力の空間」でありつづけるために
・若い人が挑戦したいこと ・必要なしくみ
- 15 : 50~16 : 00 総括

※上記スケジュールは予定として組んだもので、当日は必ずしも予定どおりとはならなかった。

【ディスカッション要旨】

※本要旨の後にディスカッション全体の記録があるので、併せて参照されたい。フロアを交えた意見交換については、全体記録の方に収録している。

地元愛知町出身の舞踏家・浅井信好氏は、海外活動の最中に中川運河キャナルアートの存在を知り数年にわたって参加してきた。帰国後、自ら『月灯りの移動劇場』を主宰している。高山葉子氏は、ミュージックシアター（劇場性のある音楽）の制作・研究に携わる作曲家である。2016年、アートプロジェクト『航跡図 Artery of sound』を企画し、地域の子どもと作った舟の模型を運河に浮かべ、これを背景に松重閨門を舞台とするパフォーマンスを行った。原佳希氏は、百船町の木造倉庫で古材とアンティーク家具を販売し、福住町で古材から家具を作る工場を営んでいる事業者である。

ディスカッションは、「なぜ中川運河でアートか」「アートから何をめざすのか」「チャレンジのために必要な仕組み」という、大きく3つのテーマに沿って進んだ。

「なぜ中川運河でアートか」について、まず浅井氏から、地域振興とアートを掛け合わせるという最近の流行りを意識しつつ、中川運河のエリア特性をふまえて、町工場の職人たちが蓄積した技術をアートに生かした「メイドイン中川運河」を世界に伝えたいとの思い入れが表明された。アートを手助けとして、職人たちの技術継承・向上や新しい仕事の創出へ繋げることが、中川運河にとってハードルは高いが魅力的な目標になると氏は言う。これを受けて原氏からは、中川運河エリアに蓄積された職人技術に対する感銘の意とともに、日常の営みとしてアートと事業を結びつける現実的な方法を見出すことが重要との考えが示された。アーティストと事業者というように、両者の視点・立場は異なるが、中川運河をその場かぎりのアートイベントを行う場所にとどめず、アートとものづくりの持続的拠点に育てることが必要という認識で共通していることが伺われた。

一方、高山氏は、住民の中川運河への思い入れが世代交代によって希薄化しつつあるという認識から、子どもと中川運河の関わりを蘇らせたいとの思いでアート作品の制作に取り組んだと語った。そして、そうした関わりを一過性のものに終わらせないために、運河祭りのように地域の人々が主体となる活動にアートが力添えをすることで、子どもと運河の繋がりをつくりつづけるというアイデアが示された。

つづいて、「アートから何をめざすのか」という問いかけに対して、原氏は、追求すべき中川運河の像がまず明確にされ、それを実現するための方法としてアートを位置づけるのが本来の順序であると指摘した。さらに、危険や汚さを伴う事業を担う者の視点から、中川運河で絵に描いたような綺麗な町をめざすことに疑問を呈し、産業が活発な町には楽しさや明るさとセットで汚さや暗さがあり、

それらが一体となって町の賑やかさをつくり出すのではないかと熱弁をふるった。

舞踏家として国際的に活躍してきた浅井氏からは、地元に戻ってきたものの、仕事があるのは海外と東京のみで、名古屋では自分のアートが必要とされる場所がない現状が述べられた。そのうえで、外部者の視点を入れて中川運河という場所をきちんと知り、明確なビジョンを立てたうえで、旗振り役となるリーダーがアーティストを含む多様なアクターを引っ張ることが必要との考えを示した。アーティストに資金を与えて運河再生とアートの関係を考えさせるのではなく、めざすべき再生像に照らしてアーティストが実力を発揮できるミッションを明示すべきというのが、原・浅井両氏に共通する主張だと思われる。

後半のディスカッションでは、「**チャレンジのために必要な仕組み**」を中心とする議論が交わされた。まず浅井氏から、助成制度（ARToC10）が動いているうちにアート活動を根づかせるべく種を蒔こうとしているが、ささしまを中心とする再開発の波が押し寄せるなかで、賃借に応じている倉庫物件を見つけることが困難を極めているとの報告がなされた。アーティスト一人が耐えられる負担には自ずと限界があるので、皆でリスクを負担し合う仕組みができないかという氏の発言に対して、原氏からは、古民家などの空き物件をデータベース化した知多・大野町の事例が紹介された。

場所確保の難しさは、恒常的なアート活動の拠点のみならず、アートイベントの実施場所についても当てはまる。高山氏は、松重閘門の閘室の使用許可を申請したときの苦労話を生々しく語り、運河再生を掲げる助成制度で採用されたアーティストが現場で苦々しい思いをすることに矛盾を感じた、という率直なコメントを述べた。さらに、汚さや暗さも町の構成要素であるという原氏の意見にふれつつ、綺麗な公園とは少し異なる荒々しさのある空間、社会の光が当たりにくい人が憩える場所としての中川運河に魅力を感じると述べ、再生計画はいかなる「にぎわい」をイメージしているのか、という疑問を提起した。氏は、何をもってにぎわいと言うのかを含めて、なすべきことを打ち出すディレクターが欲しいと述べ、旗振り役の必要性を主張する浅井・原両氏と見解の一致をみた。

最後に司会者から、中川運河再生にアートの力を「利用する」ことは有効ではあるが、都市政策の方向性はしっかり示すべきであること、また、「利用する」と同時に「育てる」仕組みがなくては継続的な活動は難しいのではないかと、いう総括的なコメントを行った。これを受けて原氏は、古いものを全て壊して新しくするのではなく、価値を再発見するのがリノベーションの考え方であり、自分も中川運河のリノベーションに関わっていきたいという希望を述べた。併せて氏は、個人どうしてコミュニケーションが取れ、若い人でもアクセスしやすいプラットフォームを作ってはどうかというアイデアを提示した。浅井氏は、賃貸に応じてくれる物件さえあれば、アーティストが自由に創作を行い、地域の人々や子どもとコミュニケーションできる場所が設定できるとし、カリキュラムを組んでアーティストを育成するといった可能性への強い期待を表明した。

【ディスカッション記録】

※ディスカッション記録は、当日のテープ起こしをもとにしているが、論旨を理解しやすくするために、本旨に影響しない範囲で一部割愛または文章表現の手直しを行った箇所がある。

話題提供者自己紹介

浅井 月灯りの移動劇場という劇団のようなものを主宰し、この地域で活動しています。生まれも育ちもこの地域で、今もここに住んでいます。舞台の上で踊るダンスというものを作ってい

ます（約3分間の活動紹介映像上映）。高校生までここにいて、その後ニューヨーク、ドイツ、イスラエル、フランスと約10年間海外で活動をしていました。そのなかで、チャンネルアートさんの活動をたまたまtwitterで知って、地元でまさかそんなことが起きているとは思いませんでした。この場所でダンスを始めたんですが、僕にとっては何も無い、暗い場所だったので、そこで何かやっている方がいるというのは驚きで、最初はお手伝いから始めさせていただきました。そこから約4年半ぐらいチャンネルアートさんとやらせていただくなかで、海外にいて年に1回手伝うというのではなく、僕もこっちに本格的に戻ってきて、ここからアートを作っていけないかということで、戻ることになったのが1年半ぐらい前です。その間どんなことをやってきたのかを資料を使ってご説明します（資料[浅井信好活動記録.pdf]）。

高山 私は普段は作曲家として活動をしております。ただ音だけではなく、その音楽が演奏される場というものを考えるようにして、ミュージックシアターという音楽を聴きながら視覚から入ってくるものも楽しむ劇場性のある音楽を作ったり研究しています。三重県出身で、愛知県立芸術大学に進学して以来20年ぐらい住んでいますが、中川運河は知りませんでした。自分の音楽をどこの場所でやるのかということに興味を感じていて、そういう場所を探していたなかでARToC10という助成金を知り、初めて中川運河と出会いました。それからこの場所をすっかり好きになり、昨年、「航跡図 Artery of sound」というプロジェクトを松重閘門でやらせていただきました。松重閘門の尖塔の背後に見える中川運河の水上に、地域の子もたちと一緒に作った170艘の舳を浮かべました。また、かつて堀川との水位調節の機能を果たしていましたが、今は埋め立てられてしまっている閘室を舞台としてパフォーマンスも行いました。舞台上で行われるパフォーマンスの背後に、子どもたちと作った舳が借景となって、水上のインスタレーションも、閘室内の舞台も、音楽も、すべてが一つとなって世界感を作り出すように、というものを作りました。当日の様子は中京テレビさんに取材を受けまして、キャッチという番組でも放送されました。

作品作りは美術家のナオヤスダとともにやっているんですが、私どもはこのプロジェクトを通して、子どもたちの中川運河への意識を変える事ができたらいいなというのをテーマとしています。この地域にとってよそ者である私たちにとっては、中川運河はすごく素敵だと感じたのですが、最初このプロジェクトのお話をした地域の方や小学校の先生たちは、「なんでこんな汚いところでやるの?」「子どもたちには近づくなと言ってる」と言われて、とても残念でした。ご年配の方は昔飛び込んで遊んだと仰っていて、昔の子どもたちはもっと繋がりをもっていたと思うのですが、現在はいろいろな理由で運河との繋がりがなくなっています。子どもたちにとって中川運河がポジティブな場所になったらいいなと思っています。将来、自分は中川運河出身で、あそこで育って、今の自分があるんだという誇り高いアイデンティティになるといいなということを意識しました。そのような思いで、広見小学校と露橋小学校の全校生徒に参加していただいて、舳を作っていただきました。作った方には、「きれいだね」「こんな風に運河がみえると思わなかったよ」と言っただけでした。このプロジェクトを1回で終わるのではなく、継続して、中川運河の魅力を変えるというよりは浮かび上がらせるアートとして続けていけたらいいなと思っています。

原 百船町の木造倉庫で古材とアンティーク家具の販売をしています。また、福住町で古材を加

工して家具をつくる工場をやっております。もともとは大須で父親の代から骨董品屋をやっていたんですが、2010年にこちらに移ってきて、今年で6年目になります。昨年、浅井さんと出会って、「月灯りの移動劇場」でおもちゃ箱の製作に協力させていただきました。今年も「月灯りの移動劇場」の美術を一緒に作らせていただく予定をしています。

なぜ中川運河でアートか

内山 自己紹介のなかで、いろいろなキーワードが入ってきて興味深い点がありました。とくに浅井さんの自己紹介では端々に言及されていたのですが、どうして中川運河でアートなんだろう、中川運河で行うアートがめざすものというのを1つ目のテーマとしてあげさせていただいております。まず皆さま一言づつお話いただいて、話を広げていきたいと思うのですが。

浅井 地域の風景、ここでいうと中川運河という風景とアートというのは、単純に今、流行りになっていることです。今まではハコモノで劇場を作って、そこに人を呼ぶというかたちを行政がやってきたんだけど、これからは地域振興とアートを掛け合わせるというのが、コストも落とせるし、来た人も楽しめるということで主流になってきた。過疎化しているようなエリア、山の中、今まで地元の人がなんの魅力もないよね、と思っていたところに外部から来た人が価値を見出すというのは、全国で行われていることです。

中川運河もそれに近いものがあるけれども、自分はここで生まれた人間。なので、ここにある町工場の優秀な職人さんの技術を、舞台美術などアートに生かして世界にもっていき、「メイドイン中川運河」を世界に伝える、というのが僕が考える中川運河のアートなんです。日本全国で流行っている、ランドスケープやサイトスペシフィックと言われる地域振興よりも、もっともっとリアルにアートを通して職人さんと手を繋いで、中川運河を外に出していく。そして、観光として人が集まるだけではなく、ちゃんと職人さんも技術継承、技術アップして、新しい仕事もできてというように、職人さんの仕事がなくならないようにアートによって手伝えればと思います。ただ、それはとてもハードルの高いことで、僕たちもグッズを作っているわけではないので、一回舞台を作ったらそこから先、何年も作らないので。逆に原さんは家具を造ったり、古材を組み合わせていろんなものを作ったりしていて、中川運河の地元の職人さんと一緒にやられているので、原さんが考える中川運河とものづくりという考え方の方が参考になるかな、と思います。

原 僕は、アーティストではなく、アーティストと交流の多い事業者という立ち位置です。中川運河に来たのも、前に使っていた八田の倉庫が急に立ち退きになって、別の倉庫を探していたら、たまたま今の倉庫に出会って、一目惚れをして、どうしてもこの古い倉庫でやりたいというところから始まったんです。そもそもアートってなんだろう？と考えますと、僕たちにとっては、どっちかという大切なのは日常生活だと思うんです。毎日ここにいるわけですし。イベントごとで何か人がたくさん集まって、ということではなくて。

たとえば古材というのは特殊な材料なので、職人さんにどういう風にお問い合わせいただければ加工していただけるのかとか考えるのが日常。浅井さんも言われていたように、かなり技術的に高い人が多い町だなという印象があって、金属加工、鋳造、木材加工、突板（つきいた）加工など、古材を加工する上でいろんな方と会って、今は浅井さんに紹介された鉄工所の方をお願いしているんですが、やっぱり技術は高いです。それから、2代目、3代目と引き継ぐ方がい

る工場は未来性があると思います。最初はおじいさんの職人さんに可愛がられて、原さんがやりたいなら安くやってあげるよ、とっていただいたりもしてたんですけど、死んじゃったり、仕事をやめちゃったりということで、それだと先がないのが辛かった。自分ももっと先々にいろんな制作をしていきたいので、浅井さんの紹介で若くて技術のある職人さんと出会えたのは良かったです。

ただすごく閉鎖的なところもあって、たとえば今、鑄造ですごい壁に当たってしまって、鑄造屋さんをお願いしても「鑄造っていうのはね…」という話から始まって、すごくハードルが高くて。光造形とかで型を作ったとしても、鑄造さんがいいよと言わないとできないんですよ。型は鑄造さんが付き合いのある木型屋さんで作るのがルールというようなこともあって、僕もだんだんこの何年かでそういうのがわかってきたんですが。

浅井さんは実現したい非現実的な世界が決定的にあって、自分たちは浅井さんのためになんとしてでもそれを形にしたいと思うんですが、浅井さんはそれを形にすることだけが目標であるのに対して、自分はそのやり方はちょっと乱暴かなあと思ったり。それだと職人さんは動いてくれたとしても、それが僕たちの毎日にどういう風につながっていくんだろうということを考える。その時は楽しかった、やってよかったと思うけど、でも、明日からはまた現実に戻るのか…というようなことにはしたくないな、と思うんです。どちらかという日常が未来性のあるものになっていくべきだし、浅井さんがやっているようなアート活動や特殊な何かがあっても、それがどういう風に先に繋がっていくのか。アーティストが毎日いてくれて、町のためにすべてをしてくれるわけではないので、アートと日々の事業がどう風に結びついていくかが大切。それから、若い地元の人がどれぐらい興味をもってくれるかということも大切で、もっとクロスジェネレーションしていったほうがいいんじゃないかと僕は思います。

浅井 キャンナルアートは中川運河の景観とアートというものを8年前からやってきたんですが、その中でいろいろな問題点を感じたはずですよ。年に1回、1000人来た、何万人来たと言っているのも一過性のもので、普段は昔と何も変わらないまま。じゃあ、そのやり方はそのやり方で残しながらも、もっと原さんのようにここで毎日を生きて、アーティストもここで日常を生きて、ということをやらない限りここは変わらないというのは僕もわかったので、そのために高山さんがやっているように、未来の人を育成する、若い子たちに中川運河を好きになってもらう、ここでものづくりをするのを楽しんでもらう、ここでアートがあることが当たり前になっていくということをやりたい。そのために、キャンナルアートさんたちも、どうにか環境を整備しよう、ここでアーティストが集まれる場所を作ろうと動いてくれている。リンナイさんもARToC10という助成金を出してくれたり、部品センターという場所を提供してくれる、そういう地域の方たちの理解がある。僕らもここを拠点にものづくりとアートで外の人達に自慢できるようなものを作って、僕らもそれで毎日生きれるようにちゃんとお金を稼いで、地域の方たちもお金を稼いで、やっていかななくてはいけない。その2つの流れが絶対的に必要。

高山 私は中川運河1年生で、自分とこの場所との関わりを考え始めてまだ日が浅いのですが、自分がなぜここでアートをやるんだろというのは、作りながら模索していました。地元のいろんな人に話を聞く中で、ここの人たちにまず中川運河の未来を描いてもらうことだと思いま

す。地元の人に「中川運河、素敵な場所ですよ」という話をすると、「こんなところあかん」と言われるんですが、話をしていくと、みんなこの場所が大好きというのがわかる。中川運河が盛んだった時代の話をする時は、すごくキラキラして、子どものころの生活や思い出を話してくださるので、その世代の方たちには「大好き」という思いがあるんだなあ、と思います。でも、じゃあ今の子どもたちはどうだろうと思うと、今は昔のように運河が使われていなくて、閑散とした場所で、真っ暗で、周りの道が広いだけに夜来ると怖く、先生たちがあの場所には近寄るな、と仰ることも一理あると思います。かつて盛んだったころの中川運河を知っている人達は、やはりこの場所に愛着があって、この場所を良くしたいと思っているけど、今の子どもたちがこの場所は「あぶない」「きけん」「きたない」というようなネガティブなキーワードでとらえていたら、この先ってあるだろうか？と思いました。私は今の時点で、中川運河に魅力を感じている方に話を聞くことが出来て、やっぱりこの場所は素敵な場所なんだと思いました。地域の子どもたちはこの場所が素敵だと思って、自分たちの未来に進んでいくんだろうか…そういうことがすごく気になった。私がここにきて感じたのは、まず子どもたちと中川運河と関わりをもっと素敵なものにしてみたいということです。子どもたちと船を作って中川運河に浮かべるということを行いました。別に他のかたちでもいいのですが、何か中川運河の風物詩みたいなものを素敵なかたちで作ってほしいかと思っています。

たとえば、運河祭りも元々は中川運河のPRが目的だったと伺っていますが、外から来たアートイベントだと一過性のものになってしまい、外から何か来た、そして去っていったという風になってしまうんですが、お祭りというのは、この地域の方たち、子どもたちが主体的にこの場所を好きになって、良くしたいという思いで続けていくものだと思います。過去の記憶と子どもたちの間を繋ぎ、視覚化するためにアートの提案ができると思うし、たとえばそれをわかりやすく「お祭り」というものにしてもいい。この場所の未来に向けて、子どもたちの記憶のために、アート活動というのはいいかと思います。

アートから何をめざすのか

内山 アート活動というのは、世代や利害関係を超越してコミュニケーションを活性化するツールとして有効だということだと思います。ここで一つ伺いたいのですが、浅井さんは地元のご出身で、もともとこの場所との絆のあるアーティストですので、この地域を良くしたいという思いをもたれるのはある意味当たり前だと思うのですが、原さんはたまたまこの場所に来た事業者というお立場として、どんなことを感じていらっしゃいますか？

原 いつも違和感があるなあと思うんですが、「なんでアートなのか」というのを後から考えるのはすごくおかしいと思います。ARToC10という助成金があるということからまず入ってくるのが先で、後から中川運河と結びつけるためにランドスケープ的な考えとか、地域との交流というのを考える、という順番になっているとも言えるわけですよ。本来だったら、中川運河の今の現状があって、これからなっていきたい中川運河の像があって、それに対してアートはこういう使い方ができるよね、という考え方があって、それにふさわしいアートを持ち込んで、それで上手くいったかいかかなかつたか検証して、じゃあ次はこういうのだよね、となる。そういう議論になったことが一回もなく、みんな後から理由を考えてると思う。

今、ささしまライブの再開発の臭いがぐあーっと来ていて、ちょっとでも高く土地を売りたいって人達もいるわけじゃないですか。(…)僕たちはアーティストではなくて、あそこで事業をしていて、今がめっちゃ忙しいです。6年目なんですけど売り上げも30倍ぐらいになって。そうすると考えていかなくてはいけないのは、子どもたちが安心して生活できる環境と、町が盛んということは切り分けられないんじゃないかな、と。やっぱり盛んだと従業員もいっぱい、人もいっぱいいますから。仕事の内容によっては、危ない仕事だから外国人しかできなかったり、学歴とかないから火傷してもこれやれますとか…木材加工とか家具製作とかだいたいみんなケガしますので。そういうのもありますけど、でも発展していることと、その後ろ側に暗いものがあるというのは、共存できると僕は思ってるんですよ。綺麗な世界で、悪い人もなくて、さらに町が発展して、わあ素敵ってというのはあるかもしれないですけど。僕は栄でも事業やってるんですけど、栄は発展しているし、土地が高くて人もいっぱいいるけど、悪い人もいっぱいいるんですよ。そうすると、ありそうもないNHKの子ども番組みたいなのをめざすことが、今の中川運河の周りにとって大切なことなんだろうかと。そういうことなんであれば、僕はもう、お店に戻って真面目に事業しようってなるんですよ。とにかく毎日が、一日ボロボロになって、寒いし、汚いし、でも家に帰ってまた明日も…ってことじゃないですか。でも自分たちはそれが好きですし、事業もうまくいってるし。だから僕のなかでは、汚い、楽しい、疲れた、暗い、明るいそれが全部セットで、全部あれば町が賑やか。そうなるといいなと。それが僕が6年体験してきたこと。

そして、それを受け入れてくれたこの町に感謝しています。はじめは近隣の方やリンナイさんにもいろいろ怒られたりして、今こんな風になるとは夢にも思っていなくて、毎日自分はよそ者だなあと思ってました。だけど、こうなったらどんなに嫌われてもでっかい声で挨拶して、無視されても何回でも挨拶しよう。そしたら3日に1回ぐらい話をしてくれるようになった。そうなったのは、ある友達に相談した時に「よしき(原さん)がその町を好きになっていないから、自分が好きになったら町も好きになってくれるかもよ」と言われたのがきっかけで、ある時から「この町は自分の町なんだ、好きになった」って決めたんですよ。そしたら世界が変わって、ちょっと前まで怖いところとかあって、この道通っていいのかなと思うぐらい暗いところとかあったんですけど、でも、好きになったらもう怖くなくて、そしたら普通に挨拶してくださる人がでてきたりして。事業もやっぱり少しずつよくなって、今では東京、大阪、香港、アメリカからわざわざ百船町のために来てくださるし。

僕は「かつて〇〇」とかじゃなくて、今この場所を事業ベースで考えている。昔話ばかりではなく、これからの話をしていくために、世代交代するならする。そして、すべてを明るくすれば町が活性化するというのではないと思う。産業が盛んなところではいろんなことが起こるので。公害的なものだったり、ケガとか、子どもがヤンキーになるとか。全部含めて、誰かがはっきりこういう中川運河になるといいな、というわかりやすい指針を立ててくれれば、自分たちはそれに向かって、事業やアート活動をしていく、という風になればいいんじゃないかなと、毎日そう思ってやってる。ただ、すべて綺麗にクリーンアップしていきたいという思惑は納得いかない。倉庫業や町工場って本当に大変で、そういう人たちが支えているわけじゃないですか。暗い部分は残しつつ、でも全体のビジョンをどうするかを行政なり、ディレクターがはっきり言い切ってくれるということが順番として先にあれば、この

議論は必要ないはずなんですよ。

浅井　　すごくわかる話だと思います。みなさんも地元で僕も地元だけど、地元の人が一番わかっているというのは空想で、僕もチャンネルアートさんがいなければ中川運河の魅力はわからなかった。そして、帰って来て2年近くたったんですが、1つも仕事がないんです。名古屋で僕がアートをやる場所なんてないんです。必要とされていない。海外で何十年とやってきて、35か国回ってきたのに、ここに帰ってきたら何も無い。結局今、海外と東京でしか仕事していないんです。空いている時だけこっちに帰ってきて、原さんのファクトリーで近所のおじいちゃんのようにコーヒー飲みながら、空想に耽りながら、何か面白いことできないかなあって考えてるんですよ。

チャンネルアートさんと6年ぐらいやってきて、僕も原さんが言われたような都市開発的な視点のなかでアートとは何かというのを話してきたんですが、でも、結果論としてここで僕が必要とされていないということは、僕の仕事がないことでわかっているんですよ。だから結局今のままでは何も意味がなくて、僕の能力も使えないということがわかった。だから、原さんから指摘があったように、こことは何かというのをもっとちゃんと知らなくちゃいけない。地元の間人だからこそ見えなくなっちゃってるんですよ。

あとはやっぱり、地域の人、行政の人、僕らアーティストとか、全部ひっくるめたリーダーとなれる旗振り役、10年後こんな町にしましょうと言える旗振り役の人がいてくれたら、僕らアーティストとしてたとえばこういうお祭りが出来る、お祭りがあるところこのメンテナンスができる、原さんのような事業者の人が毎日こういう活動をちょっと変えればここは変わるよねとか、そういう議論ができる。

原　　アートってやっぱり大事だなと思います。たとえば、僕は古材を使った空間演出っていうのをミニマルなカタチで示すための小屋を今までに何回か作ってるんですが、作っただけで終わるとすごく怖い場所になってしまった。本物の古材なので廃墟みたいな感じになってしまう。そこで、いつも友達のアート作品映像を小屋の外側か内側に投影させて、完成させるっていうのをやっているんですよ。その時にアートってやっぱり大切だなあと感じた。自分と状況のバランスをアートがとってくれるというか。

ただ、順番的にお金もらったから考えなきゃというのは意味ない。必要性を見出して依頼しないと、アーティストへの依頼もあやふやになってしまう。何を求めているかを正確にしていくためには、中川運河あるいは名駅南、にぎわいゾーン、どういう括りかわからないですけど、どういう風にしていきたいのか。それによってはもしかしてアートが必要ないかもしれない。アーティストも暇ではないので、そこに注力する必要があるかどうかというのをちゃんと考えた方がいいと思う。

<休憩> (写真投影)

チャレンジのために必要な仕組み

内山　　後半の議論に入る前に、前のスクリーンでは原さんから頂いた写真を何枚か投影させていただいております。原さんの方から、この写真についてのご説明をいただけますでしょうか。

原　　堀止の脇にあった倉庫なんですけど、僕はこの倉庫が大好きで、できればこの倉庫を残して何

かに使うといいんじゃないですかという提案をずっと大家さんにしていたんです。壊されることが決まってしまったので、自分の記録として写真撮影だけすればよかったんですが、その時にイナタカユキ (ina takayuki) くんというアーティストを呼んで、誰もオーディエンスのいないライブペイントを行って、今日までどこにも出さずに1年しまっていてました。

これを今回改めて見直してみて、自分がなんでこんな撮影をしたかというのを考えました。自分はアーティストではないので、これはアートですと言うつもりもなく、でも記録であればただ建物の撮影を純粹にすればよかったのに、なぜイナくんを呼んで絵を描いてもらったのかがその時はわからなかったんですよ。この建物は今はもうなくて更地になっているんですが、次の日に名古屋市に引き渡されて入ることもできなくなってしまうという最後の日に、大家さん（である企業の方）が好きにしていよ、と言ってくださって、初めて（その企業の）会長さんも来てお会いしたんですけど、今これを見て、これはお葬式だったなと思ったんです。終わってしまうというのは誰も止められなかった。僕も結構必死にいろんな方に交渉して、ここは残してください、残すことでもしかしたらグローバルゲートのサテライトみたいな考え方ができるかもしれないし、というように頑張ったけど、結局ダメで。でも、終わるけど、ここから始めるという風に自分は思って、だから終わりを終わりとするのではなくて、終わりと始まりを繋げるという活動を僕はしていきたいんだということに、改めて自分で気づいた。僕は普段リノベーションという分野にいるんですが、古材とか、人がもういらなくなったものを自分が改造して、次の人に渡すこともそうです。この建物はもうないんですが、こんな建物がありましたっていう話をしてもしょうがないわけ。でもこうやってアーティストの人とコラボレーションして作品にしていくことで、これは僕たちの始まりなんです、ここから新しい歴史を作っていくんですっていう、何か自分の中ではそういう宣言のようなもの。（…）すごく好きな建物だった、けどもう無い。けど残された人間がそれを府に落としていく作業として、僕はこういう活動をこれからもやっていこうと思ってる。

先日とあるご夫婦から、奥さんのお母さんが亡くなって、住んでいた家を壊すということで古材の買い取りの依頼があったのですが、お母さんの思い出が詰まった家で、最後まで踏み切りつかない様子の奥さんに、自分はいったい何ができるんだろうと思ったときに、建物のお葬式をするんだと思った。それで、梁とか化粧柱とかで何か作りませんか？という提案をしたんですが、なんか違うと。そしたら、お母さんが一番大事にしていた屏風を原さんもらってくれませんかと言われた。そして屏風をもらい、家は壊し、材木で椅子でも作りましょうという話をしたら奥さんがだいぶ楽になった様子だった。そうしたら、3日後ぐらいに、屏風を返してくださいという電話かかってきて、結局奥さんが自分でその屏風の絵を描いて、屏風も破棄するということになった。僕はその一連の仕事をしたことがすごく嬉しかった。

グローバルゲートのような近代的な町、かつての中川運河の状況、今僕たちが働いていること、浅井さんたちが活動されていること、全部ひっくるめると、なんかなんともいえないことだなあという気持ちになるんですよ。僕は古いもの、なくなっていくもの、死んでしまうもの、壊れてしまうもの、人がもう評価しなくなっちゃったものとかを、最後これが何かの始まりになるっていう、繋げていく活動を浅井さんとかと力を合わせてやっていけたらいいなと思ってるんです。仏壇を作ってほしいという依頼もあったりします。残された人が納

得できる状況を作っていくという活動であれば自分も関わっていきなと思っと思っています。

内山 それぞれの方が中川運河と関わりをもち、この場所で活動をされているわけですが、原さんからは中川運河でなぜアートなのかというのは議論が逆じゃないかという指摘もありました。現在は中川運河再生計画によって「港と文化を感じる都心のオアシス」を形成することがめざされていて、リンナイ株式会社さんの出資による ARToC10 の助成によって、アーティストが集まり、様々な活動が行われているという状況です。では ARToC10 の助成がなくなったらどうなるでしょうか？ 浅井さんは海外に行ってしまうのではないですか？

浅井 さびしい話ですが、今のままでいくとそうなると思います。お金の切れ目が縁の切れ目になってしまう可能性がある。日常的にここでアートをするには場所とお金が必要で、アートって基本的にお金にならないものなのですが、作るにはお金がいるので。もし ARToC10 というサポートが得られなくなったら、アーティストは必ず離れていく。もちろん今、種を蒔こうとみんな努力をしていますけど、種を蒔くにも場所が必要。ちゃんと、常にアーティストがいる、常に関わりをもてる場所がないと無理なんです。ただ、僕はここが地元なので、すべてのコネを総動員して、1軒1軒しらみつぶしに呼び鈴を鳴らして、原さんにゾンビって言われたんですけど、ゾンビのように、「この大家は誰だ、この大家は誰だ」というように、借りれる場所を探し回ったんですよ。だけど、かつてバブルが崩壊して、家賃滞納があつたりして、やっと出て行ってもらったというように思っていることもあって、なかなか貸してくれない。浅井さんとこの息子さんいい子だから貸してあげたいけど、もう売ろうと思っていて…みたいな話が本当に多いんです。

そんな中で、たまたま昨年末に 300 坪ぐらいのトイピアノ工場ですごい面白い形をした木造スレート倉庫を発見して、廃業して 5 年ぐらい経っていて、もう明日不動産屋さんが来るっていうタイミングだったんですけど、僕も必死で話をして、原さんも呼び出して、木工の重機も残っていたので、とにかくここで何かものづくりをしたいとお願いをしたんですけど、今はバブルのころよりも高い値段で売れるって言われたんですよ。たぶん、ささしまの再開発の関係もあると思うんですけど。でも大家さんはそんな好条件のなかで、僕らの熱意に耳を傾けてくれて、どうにかレンタルしてくれるというところまで言っていたんですけど、それだけの場所を借りるとなると、なかなか今アートでお金を稼げないので、10 万か 20 万ぐらいならなんとかなっても、それが何十万っていう大きなお金になればやっぱり無理なんです。それで、こんなもったいない、もう一生出ることはないだろうというような倉庫だったんですけど僕の方では無理だったんです。原さんにも、6 年前だったらまだこの地域も倉庫があつたけど、ささしまの再開発のこともあって、いろいろ壊された後なので、もう出ないよと言われていたなかで、唯一出てきた倉庫だったので、どうにかしたかったんですけど。

だけど原さんは、6 年前に今の僕のようにゾンビのようになって今の倉庫を見つけて、そしてすべてのリスクを自分で背負っていまの場所を作ったんです。アーティストは、企業の方がお金を出してくれたらとか、行政の人がお金を出してくれたら、というようにみんなその言い合いなんです。僕らも、アーティストはお金がないから、誰かがサポートしてくれたらって。だけど、原さんだけは僕の知ってるなかで、自分のリスクで自分の城を作って中川運河と関係をもっている。それがみんながやってかなきゃいけないことだと思っている。

でも1人でリスクは背負えないから、ちょっとずつみんなで出し合える場所を作りたい。僕は自分で借りられるレベルの倉庫があるならすぐにでも借りたいんです。そうでないと、あと5年して、助成も得られなくなったら、否応なしに外に出なくてはならなくなる。仕事をする場所が海外とか東京なので、ここに残る事はできないんですね。だから今もゾンビのように探して、自分のリスクで使えるところを探しているんです。

内山 今、浅井さんが個人のレベルで必死にやっておられることを、もう少し仕組みとしてサポートすることが必要なのではないのでしょうか。

原 知多半島の大野町というところで、日本最古の海水浴場というのを売りにしている町があるんですけど、その古民家とか古いアパートとか郵便局の跡地とかがひたすら空いているんですけど、だれが大家さんかわからないという状況があるんです。それを「ウサギマン」と名乗る、もともと写真家の人が1人で5年かけて1件ずつ物件を調べてリスト化し、役所に行ったら所定の金額を払えば誰でも大家さんを知ることができるというところまで公開したんですよ。「ウサギマン」さんは完全に1人で、ボランティアでやったんですけど、みんなで協力してやればもっと苦労せずにできるんじゃないかなと思います。あとは、浅井さんが個人で貸してくださいって言ったらダメな物件でも、もしかしたら別の人をお願いしたらOKという場合もあると思う。

内山 信用を保証するような仕組みということですね。

高山 大野町では、その物件を売りたいと思っているのでしょうか？

原 すべて個人対個人の物件で、ここみたいに、デベロッパーがマンション建てたいからこの一区画全部欲しい、みたいな話があるような場所ではないんです。だから大野町はずっと空き家のままなんですけど、ここは、デベロッパーとのせめぎ合いのなかで、浅井さんみたいな人が来ても、絶対怪しまれるだけじゃないですか。

浅井 そうなんです。僕が物件見に行ったときにはもう5人ぐらいカメラを持った人がいて、やっぱりこの物件が売りに出るっていうのをデベロッパーの人達は知っていて、見に来てますよ。大家さんたちも、もしかしたらこの辺りがまだ高くなるんじゃないかと思っていて、空いていても貸してくれないという状況もあって。ささしまとかリニアが終わって、この辺は上がらないねってなればまた物件が出るかもしれないですけど、その前に僕は手を打ちたいと思っていて。でなければ僕のパワーが切れてしまうので。

原 ARToC10があと何年かで終わるということを考えると、そういうことと連動していない限りブツンとそこで切れて、アーティストが一時期いたけど今はいない、という状況になってしまうので、助成があるうちに次はそういう人達が定着していく場所を作っていくってことですよね。

内山 高山さんもこれまで個人の手で門を叩いて、地域のつながりを作ってきたと思うのですが。

高山 私たちは屋外空間を使った作品だったんですが、屋外空間を使うというのも実はハードルが高かったです。たとえば一例として、中川運河再生計画ににぎわいゾーンにおけるアート活動が位置づけられているからには、前提としてアート活動がここで歓迎されていると私は思っていたんですが、松重閘門を使うのもハードルが高かったです。

先ほどのお話のなかで、お金があるからアーティストが来ていると言われましたが、まさ

に自分はその助成があるから中川運河にやって来たアーティストで、お金がなければ来ていません。ただ、ここでアート活動をしていくなかで、相当この場所が好きになって、もう自分はここで生まれて育ったんじゃないかと思うぐらいの意識でやってきたので、今ではもちろんARToC10がなくなってもやりたいという思いはもっていますが、はっきり申しまして現実的にはそれは無理だと思います。

そんななかで、ARToC10に助成事業として採択されて、にぎわいゾーンでアートを行うために松重閘門を使いたいということで中川土木事務所に行ったら、4万2千円かかると言われたんです。中川土木事務所の方も、とても協力的で、なるべく金額を安く計算して下さったんですが、それでもこの金額がかかると言われて、びっくりしました。助成では1つのプロジェクトに300万円ただけて、それは大金なんですけど、アートプロジェクトを行うには300万円というのは決して十分なお金ではないんです。私だけではなく、採択アーティストはみんな、いくら自腹を切るかというなかでやっています。その中で4万を超える金額を言われたことは大ダメージだったんです。それで都市センターさんなどにいろいろ相談したら、地域の方がそこを喜んで使うようなものだったら無料で使えると言われたんです。ただすごく難しいよと言われてたので、じゃあ過去に無料になった例は何かあるんですかと聞いたら、「夏祭り」と言われたんですね。それで、広見の自治会、区政協力委員の方々がとても味方になってくださっていたので、区政協力委員長さんをお願いして、申請者になっていただいて、それで晴れて無料で使えるようになったんです。

そこで私が思ったのは、私、何のためにここにいるんだっけ？と思ったんですよ。もちろんARToC10でお金が出るから来たんですが、お金が出なくてもアートの力を信じて、求めてくれて、私たちがなんらかのことを出来るのであれば来るんですよ。ところが私は名古屋市に歓迎されていない？と思ったんですね。そもそも名古屋市はここで何をしてほしいんだろうと思いました。

にぎわいゾーンという言葉も、なにをもってこの場が賑わったという結果として認めるのでしょうか。ただ賑わえばいいのであれば、海外の大物ポップアーティストを連れてくれば何万人も集まるかもしれませんが、おそらくそうではないから、ARToC10の特徴として名古屋に関係のあるアーティストを起用するのがあるんだと思います。

それから、先ほどの原さんのお話ですごく共感したのが、汚いとか暗いというのも街を構成する一つだというお話。中川運河に来てすごく好きになったのが、浅井さんが昔ダンスの練習をされていたポケットパークなんですけど、私が最初行ったときは、一旦綺麗にされた後に、再び落書きされて壊された状態だったと思うんです。落書きもあって、階段にはしじみ味噌汁の食べ残しが置いてあって、ベンチに座ってみようかなと思ったら座面の板が剥がされて1本しかなくて…という状態だったんです。たしかに、そこが綺麗であつたらいいなと思うんですが、綺麗にして、また落書きをして、という人たちごっこのように人が集まるというのは、ここがピカピカの綺麗な公園とは少し違う場所だからじゃないかな、と思うんです。

浅井 確かに、あそこに人が集まっているの見たことないですよ。あそこは基本的に不良の溜り場か、階段下にホームレスの人が住んでいたんですよ。僕がまだ練習している時も、ホームレスの人に「音かけていいですか？」って確認しないとすごい吠えるおじいちゃんだったん

で。一般の若い子たちがデートスポットとして使った記憶は僕のなかにはない。逆になんか、悪さをする場所みたいな。

高山 ただ、ああいう場所があることによって、自分は社会の光が当たる部分を歩けないんだと思っっているような人たちが、ちょっと憩える場所だったりするのかなと思います。中川運河を始めて訪れて、運河の両側の広い道や、工場や倉庫を観た時に、非常に荒々しさのある面白さを感じたんです。名古屋市が再生を考えると、ここの景色をどういう風にしたいんだろう？ にぎわいというのを、何をもってにぎわいと言うんだろう？ そこら辺りがわからなくて、そういうことも含めてここの場所でアートが何ができるんだろう、何をすべきなのかというのを旗振り役をしてくださるディレクターが必要だと思うんですけど。

フロアでのやり取り

内山 非常に重要な部分が議論されていると思いますが、ここで会場からもご意見を伺いたいと思います。同じく ARToC10 の助成を受けて中川運河で継続的なアート活動をされているリミコラインアートプロジェクト代表の武藤さんがお越しですので、ご意見いただけますでしょうか。

武藤 僕はこの話をいろんなところでしたことがあって、名古屋市はどうしたいのかというか、どう考えているのかというのを聞いてみたんです。ARToC10 自体が名古屋市の政策に入っているのかということを知りたいなら、別らしいんですね。現代美術という言葉も入っていない。僕が思うのは、都市の政策のなかにアートを位置づけて、そこでアートが起らないと、いつ梯子を外されるかわからない状況で、アートが安定してできないんじゃないかなということです。

ただ、(…) ニューヨークの SOHO でもアーティストがいて、そこが賑わって行って、地価が上がってアーティストがいなくなるって現象は起こっている。そういうことを見据えて、どうしていくのかというのを、政策だったり、アーティストだけではなく地元の人考えるってのが起こればいいなと思います。

大矢 露橋の下水処理場の上が公園になるという風に周辺の事業者は説明を受けています。中京テレビさんの本社の隣には豊田通商さん、プリンスホテルもできますよね。そうすると外国人が泊まって、ジョギングをするだろうし、野外コンサートでもやって、ポケットパークで子どもたちがトランペットの練習でもしたらいいなと。若い人がこうやって中川運河に興味をもって来てくれて、本当に嬉しいです。応援したいなあと思っますよ。行政の力もとっても大事だと思うんですよ。ここが世界に輝く航跡をたどれるような町になると嬉しいなあと思っんです。もっと好きになって下さいね、応援します。

加藤 こういうことにこの場所を使っただけのを私どもは嬉しく思っっているんです。西宮神社では春祭り、夏祭り、秋祭り、秋葉祭り、年末年始大祓い元旦祭り、初午祭りと年に 6 回あります。アートプロジェクトの資金源の問題と一緒に、神社の例祭もスポンサーがないとやっていけません。お金儲けは一切やっていませんから、氏子さん、会社からのお供えで例祭を行っっているんです。みなさん社務所を使っただけのは大いに結構ですので、どんどんこの場所を盛り上げていっくれればいいなと思っっています。

最後に

内山 ありがとうございます。この場所はとても雰囲気がよくて、ぜひまた使わせていただきたいと思います。オープンディスカッションの目的の一つとして、中川運河に関わる当事者を発見するということがありますので、西宮神社の氏子の方々も地元の当事者としてぜひ今後も加わっていただければと思います。

お時間も少し過ぎてしまいましたので、まとめに入らせていただきます。最後の議論としては、中川運河の再生にアート力を、悪い言葉で言えば「利用する」ということかもしれませんが、アーティストの方々も利用するならどんどん利用してくださいという心づもりでおられるように思います。ただ、その方向性はしっかり示してほしいということ、それからもう一つは、資源と同じで、アートも利用しつつ育てつつというように、継続的な活動ができる仕組みがなくては、いつかは利用できなくなってしまうということだと思います。

浅井 そうですね。そういった循環をさせるための場所だったりプラットフォーム、システムなどの用意が急務ということです。

原 最後に一言お願いします。僕は普段リノベーションの分野にいて、中川運河のリノベーションに関わっていただけたいなと思っているんですが、たとえば天井が低いんだけど面積は広い物件っていうのは売りにくいんだけど、見方を変えるといいかも、みたいなことを発見していく作業がすごく大事なんです。壊して、新築にして建ててしまえば、問題点はすべて解決できるんですよ。だけど、その建物をそのまま使う時に、今までの見方では価値が低かったものを、こっち側からみたら結構いいかも、みたいなことがすごく大事だと思うんです。中川運河も、今までは悪いよねと言われていた部分も、いろんな見方をしてみて、全部壊してしまわずに、このままでも価値を再発見できるような活動を僕はしていきたい。

名古屋市さんがとか、誰かのせいにせずに、意識のある人が、個人 to 個人でもいいですし、お金持ち to 貧乏でもいいですし、とにかく直接やらないと。じゃないと、誰かの意向を取り入れると、アートとかもねじ曲がっていつてしまう気がするんですよ。僕ももっとお金があったらそのまま浅井さんに渡して、好きにやったらどうっていうのも、アートと中川運河の関わりの一つとしていいと思っているんです。名古屋市のお金待ち、助成金待ちとかじゃなくて。たとえば、個人どうしがコミュニケーションをとれる場所をオンラインで作っていったらどうだろうっていうのが僕の今日の結論なんです。ここに今日若い人がいないということも僕には驚きで、やっぱり若い人がここに辿り着けてないと思うんですよ。もしかしてすごい中川運河のためになるかもしれない若いアーティストにこういう声が届いてないのでは、意味がないんじゃないかなあと。だからそういうのを内山さんに作っていただきたい。名古屋市主体とか、そういうことじゃなくて、地べたベースでプラットフォームみたいなものを作っていただきたい。

浅井 僕はもう難しいことではなくて、単純に誰か場所を貸してくださいということなんです。それしかないです。場所があれば、アーティストをここに集めることだけはできる。そこで彼らが自由に創造をしてもらうこと。東京とか海外だと、自分でアトリエは借りられるんです。名古屋のアーティストはそれで生活をしている人が極端に少ないので、家の中とか教室の中でやっている人が多い。でも大きいスペースがあって、たとえば10人のアーティストが自由に創作をしていて、一般の地域の人達にもそれを見せて、子どもたちともコミュニケーションができる、学童とアトリエが混ざっているような状態を作れば、もっとアーティストの

ことを知ってもらえて、アーティストもこの地域との関わりをもてるので、そういう場所を探したい。僕個人のアートスペースというよりは、名古屋で浮遊して埋もれているようなアーティストを連れてきて、ここに来れば1年間自由にスペース使っていいよと。ただ、使うだけでは意味がないので、大学のゼミのように都市センターとかキャナルアートの人とか、この地域に関わった人、地元の住民さんとかに毎月のように講義をしていただいて、アーティストを育成していく。ちゃんとこの地域から育ていけるようなカリキュラムを組んで、1年間かけて育てて、その後ARToC10に申請してもらってもいいし、自分の小さなアトリエを構えるでもいい。僕は言いたいのはとにかく、この地域に住む大家さんに「場所を貸してください。」ということです。

内山 ラストメッセージは「場所貸してください」ですね。それでは、竹中先生最後にまとめをお願いいたします。

竹中 本日は寒い中お集まりいただきましてありがとうございました。なかなか良いディスカッションができました。欲を言えば、お集まりいただいた方々からもう少し意見をいただく時間があったらと思います。それから、この場所は私は初めてですが、なかなか良い場所でぜひまた使わせていただければ幸いです。都市というのはいろんな主体が横に関わりあうことによって面白さが生まれてくるものですので、関わりの血脈を活性化することが今の時代に一番必要なことでしょう。まずは、研究者としてそういうことの役に立てればという考えからこのオープンディスカッションを始めました。また今後ともご意見頂ければと思います。本日はどうもありがとうございました。

【議論をふまえて】

オープンディスカッションの開催には、都市づくりに主体的な役割を果たしうる「地域の当事者」を確認・発見したうえで、かれらのランドスケープに対する意識を知り、さまざまな当事者相互の結びつきによる地域らしさの継承・進化の可能性を探るという重要な意味があります。今回のオープンディスカッションでは、中川運河らしさの探求からそのポテンシャルを引き出すための提案にいたるまで、積極的なアイデアの提示と議論がなされたように思います。コミュニケーションツールたる空間コードを活用することで、さまざまな関心・立場の人に中川運河という場所との関わり合いを意識化してもらうきっかけをつくることができたとすれば嬉しいことです。空間コードはデザインコードではありませんので、都市計画や建築計画の絵を自ら描く（あるいはそのための基準を示す）ことはできませんが、都市づくりの意思決定を進めるさいに取り上げるべき論点を提示することはできます以下、オープンディスカッションでわかったことをふまえて、主催者の視点から、検討に値すると思われる課題をいくつかコメントし、中川運河の当事者すべてに対して広範な議論を呼びかけたいと思います。

* * *

アーティストおよびアートと関わりの深い事業者が登壇者となった今回のオープンディスカッションでは、主に行政の方々を意識して、中川運河再生のためにアーティストにどのような役割を期待しているのかを明らかにしてほしいという希望が繰り返し表明されました。また、アーティストをはじめ

め、住民・市民、事業者など、さまざまな主体を視野に収めて、運河再生に向けての取組みを統括できるディレクター的な役割の人が必要であるという点で、3人の間に意見の一致がみられました。

実際のところ、中川運河再生計画、ARToC10の募集要項、パイロット事業募集要項など、さまざまな文書を通して、行政がめざす目標は断片的ではあれ示されています。にもかかわらず方向性が不明確だという意見がアーティストの間から強く出てくるのは、公式文書に示された中川運河再生のイメージとアーティストが感じる中川運河のリアリティの間にギャップがあるからではないかと思われます。これはどういうことでしょうか。

アートには、人々に気づきや価値観の転換を促す力がありますが、それは集客といった単純な意味でのにぎわいづくりとは異なります。また、再生計画では、にぎわいゾーンとモノづくり産業ゾーンをエリアで分けていますが、登壇者からは、アートをものづくりに繋げ、技術力と創造性に支えられた中川運河ブランドを育てているといった野心的なアイデアが提示されました。その実現性の程度はひとまず措くとしても、ものづくりやそれを取り巻く雰囲気は中川運河らしさの一部であり、そこに魅力を感じるアーティストが少なくないという事実は、中川運河の可能性を引き出すための重要な手がかりとして受け止めるべきでしょう。

* * *

以上をふまえて、検討すべき論点をいくつか提示しておきます。

まず、アーティストの間には中川運河エリアの当事者であることへの強い関心・意欲がみられますが、かれらと中川運河の関わりは地域に住み、日常を過ごす住民とは違います。また、収益性や取引先との関係などの観点から中川運河への立地を選ぶ事業者とも異なります。アートには、文化を通じて人々の間にコミュニケーションを生み出し、社会包摂による地域再生を促すという、ある種の公共的な価値があると考えられます。そういうアートが成立しやすい場、創造力を刺激する場として中川運河が位置づけられるからこそ、アーティストは中川運河の当事者として積極的な役割を果たしているのではないのでしょうか。アート活動への支援を行う以上、アーティストと中川運河の関わりの意味をきちんと吟味したうえで、当事者たろうとするかれらの関心・意欲を引き伸ばし、地域の力に変えてゆくための支援のあり方を議論すべきでしょう。とくに、今回のオープンディスカッションで大きな話題になった活動場所の問題については、市場原理のみに委ねるのではなく、沿岸用地を所有・管理する行政を中心とするアプローチ方法を検討することが不可欠と思われる。

次に、繰り返し要望のあったディレクターの配置については、その役割がアートマネジメントの統括なのか、あるいはより幅広い都市政策のプランニングなのか、またエリア的に中川運河に限られるのか、他の重点エリアも含むディレクションなのかなど、さまざまな選択肢があります。オープンディスカッションでは、アートとものづくりの相乗効果が中川運河のポテンシャルとして指摘されました。幸い名古屋市は、芸術文化振興と産業振興の両面で意欲的な計画を立てており、とりわけ国際デザインセンターの事業やあいちトリエンナーレとの連携を通じて、アートならびにアートと繋がり深いものづくりに関わる人材と経験を蓄積しています。中川運河の将来的な利用価値は、既存の計画体系や資源と連動させつつ、名古屋市全体の空間政策（施設配置計画、重点開発エリア、それら相互の連携など）のなかに位置づけることで大幅に高まるのではないのでしょうか。ディレクター配置の効果や制度上の位置づけについても、そうした中川運河の戦略的な価値に照らして検討することを提案します。

最後に、上に述べた2つの論点の両方に関係する検討課題として、中川運河沿岸の土地利用計画があります。中川運河再生計画では都心から港までを3つのゾーンに分けています。しかし、中川運河の特性をふまえたときに、ゾーニングとともに（あるいはそれ以上に）重要なのは、運河軸がそれを挟む周辺エリアに与える波及効果をとらえる視点です。つまり、公共政策の手が直接及ぶ運河から倉庫敷地を挟んで道路に至る空間、とりわけ倉庫敷地の土地利用デザインを引き金として位置づけ、かつて建築敷地として分譲された民地を中心とする周辺エリアの中長期的な土地利用を誘導するという発想です。港湾地区という制度的条件をいかしつつ、いかに効果的な土地利用の継承・進化を実現するかは、そのなかでのアートの役割にも密接に関わるテーマであり、議論の深化を呼びかけたいと思います。オープンディスカッションでも、次回以降のテーマの一つとして取り上げることを検討しています。

（都市コミュニケーション研究所）

【次回に向けて】

今回のオープンディスカッションでは、話題提供者の皆様それぞれが、ご自身の言葉で思いを語ってくださったことで、大変議論が盛り上がったと思います。発言が場の雰囲気によって左右されるとすれば、どのような場を設定するのが非常に重要であると感じました。

「都市」「まち」「にぎわい」という言葉の中身は、一人ひとりが発想し、その積み重ねによって実態をつくり出していくものと思います。今回のディスカッションでお話下さった3人の方の活動はまさにその実態の例であったと思います。しかし、彼・彼女らと中川運河の間には、艇乗りと運河のような切り離せない結びつきがあるわけではなく、本来、中川運河とはなんら関係のない仕事をされています。それゆえ、なぜ中川運河と関わらなくてはならないのか？という問いに答えが見出せなければ、関係は疎遠になっていくものと思います。

中川運河周辺で日常を送っている人の多くは、中川運河と直接的な関係をもたず、中川運河について何も語ることはない人々です。しかし、かつて中川運河を賑わせていた人々も、中川運河のために生活していたわけではないでしょう。中川運河は彼らの日常の背景、舞台としてそこに横たわっていました。中川運河を再び都市の中で積極的な役割をもつ場所として機能させるには、日常の担い手たる人々と中川運河が結びつくこと、すなわち、人々が中川運河のために何かをするというのではなく中川運河が人々のやりたいことができる場所になる必要があるのだと思います。

中川運河の利用率が低下した1970年代、周辺事業者に運河の今後について問うたアンケートでは、回答者の6割が運河を埋立て、道路、駐車場とすることを希望していました（「内陸水路網に関する調査研究報告書」運輸省第五港湾建設局、1973年）。当時は、アート活動の場として利用するという意見があったとしても、今のように耳を傾けられることはなかったでしょう。判断のもとになる情報が限られていたからかもしれません。オープンディスカッションを通じて、狭くなりがちなわれわれの視野を広げ、接点のなかった人どうしが出会う場を提供できればと思っています。

（内山志保）

【謝辞】

今回の開催にあたっては、中川運河エリアの事業者である三ツ矢製菓株式会社よりビスケット菓子「ビスくん」袋入 240 個、紙筒入 40 個を御提供いただき、当日の参加者へ配布するとともに、一部は会場の西宮神社へ寄贈させていただきました。記して御礼申し上げます。

(以上)